箱街の端

外国語学部
中国語学科４年
小橋　風音

踏切

線路がひとつ延びている
一直線に一本線
まばらに踏切はみるけれど
駅はひとつも見当たらない

線路に沿って歩いてる
踏切見れば向こう岸
渡って戻ってふらふらと
道草喰っての夜もすがら

音も私も抜き去って
電車は通り過ぎていく
かんかん踏切鳴るときに
電車来るのは手前から

追い抜かれたことはいちどもない
電車が走っているからには
駅は必ずある筈で

私が歩き始めた駅も
きちんと今でもあるはずだ

けれどどうにも覚えがおぼろで
はっきり記憶にないけれど
線路に沿って歩いた末に
視界にけぶる終着駅は

きっとあの駅に、少し似ている

街角

外を歩けば目に留まる
景色は目の端、葉擦れの隙間
雨上がりは道の窪みに
まばらに鏡を落としこむ

T字路　三叉路　辻の端
気持ちばかりに項垂れて
ガードミラーは静かに佇む

こんがらがった、送電線
緩くたわんで張られた黒を

切れば　辺りは　　真っ暗闇

『箱街の端』コメント

今回の懸賞論文では、詩の部門にて応募をさせて頂きました。一篇目の「踏切」は、度々生き方や分岐点などの「たとえ」に持ち出される線路をヒントに書きました。走馬燈を線路・鉄道に置換すると、停車する必要がある駅よりも、走るうちにくるくる変化する車窓の景色のほうがよほど的を射ている、と感じた上で一篇目を考えました。

二篇目は、一篇目を練っているときに思いついた断片を基に書き上げました。町中によくあるものを軸にした構想を意識しています。

主題の一部にある「箱街」は箱庭、というよりも少々範囲を広げながらも、自身の中で完結してしまっている風景という意を込めて、この名称となりました。